

例会記録

日本医史学会・神奈川地方会（第33回）9月合同
例会 平成20年9月13日（土）

相鉄岩崎学園ビル5階505号室

一般口演

1. 三才の病因論 家本誠一
2. 赤痢菌とペスト菌の耐性化の歩み 滝上 正
3. ハンセン病 (Leprosy) の世界史 佐分利保雄

特別講演

アドルフ・マイヤーから学ぶこと 松下正明

平成20年10月例会 平成20年10月25日（土）

順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 医師の装束 町泉寿郎, 天野陽介, 小曾戸洋
2. 人体観の歴史 坂井建雄

平成20年11月例会 平成20年11月22日（土）

順天堂大学医学部9号館2階8番教室
シンポジウム「森林太郎と森鷗外」

1. 統計論争をとおしてみた森林太郎—シンポジウムへの導入をかねて— 岡田靖雄
2. 森林太郎の医学大業績—臨時脚気病調査会の創設とその成果— 山下政三
3. 森鷗外と『後北游日乗』、『北游記』—函館、青森を中心として— 松木明知
4. 森鷗外と医学留学生たちの交流 山崎光夫

例会抄録

医師の装束

天野 陽介, 町 泉寿郎, 小曾戸 洋

日本における医師の装束については、その変遷、官位と装束との関係など未だ明らかになっていない事項が多い。これらを考究していく端緒として、今回は肖像画に描かれた装束に絞って検討を加えた。調査対象には『杏雨書屋所蔵医家肖像集』（武田科学振興財団，2008.6）を用いた。例会当日は、肖像画に見られる装束の分類に加えて、肖像画数点を取り上げ装束の解説を行った。

衣服は大きく5種がみられる。朝服に類するもの、法衣に類するもの、羽織に類するもの、上下に類するもの、その他である。

①朝服に類するもの

朝服とは官吏が朝廷に出仕する際に着用した衣服である。主に宮廷医がこの類の衣服を着けている。束帯に次ぐ正装である衣冠を着用したものに

は、和氣親成、山科厚安、畑黄山、和田東郭などがある。狩衣は平安時代には公家の略装であったが、後に礼装となった。狩衣を着用しているのは越後丹介、小森桃塙がある。ほかに宮廷医ではないが吉益東洞・吉益南涯（1750-1813）が狩衣を着用している。

②法衣に類するもの

法衣とは僧尼の着る衣服。医師が剃髪し僧形をなした始めは諸説あり定かではない。富士川游は「思うに、医者が僧形をなしたのは、鎌倉の武家にて戦場にて事なからしめんためにとて医者を僧形にしたるがその始にて、それが後に至りて京都の医官にも移り行われたるものではないかと考えられる」（「医者の風俗」『富士川游著作集3』）と考察している。

法体をした肖像画には、曲直瀬道三(剃髪、直綴、白の小袖、白袴、中啓)、曲直瀬玄朔(剃髪、袈裟、直綴、白小袖、白袴)、曲直瀬玄淵(剃髪、袈裟、素絹、白小袖、白袴、小刀)、山脇東洋(剃髪、直綴、白小袖、白袴、中啓、小刀)、多紀元簡(直綴、白小袖、白袴、中啓、小刀)などがある。直綴を着用している者はほぼすべてが白小袖、白袴を着用している。

③羽織に類するもの

十徳は、その名は直綴の転ともいわれ、素襖に似た衣服で中間・興昇などが着用した鎌倉末期に始まる衣服、また江戸時代には医師・儒者などが着用した紗などで作られ黒色無文で共布平紵の胸紐をつけたものをいう。医師が着用した十徳は後者である。小野蘭山、松岡恕庵、緒方洪庵、川本幸民ほか多くの医師が着用しており、その多くは着流しの上に着用している。

羽織は丈の短い外衣で、裾は引き返しにして両脇に襠を入れ、襟を折り返し、胸もとで紐を結んで着る。浅田宗伯、三宅良斎のほか多くの医師が

着用している。

④上下に類するもの

江戸以前には肩衣袴は武士の普段着であり、江戸期になって麻製の上下共布が武士の普通礼装となった。上下を着用しているのは武士として仕官していたもので、青木昆陽、稲生若水などがあり、そのほとんどが月代に髷を結っている。

⑤その他

その他に特徴的な衣服としては、堀杏庵・浅井凶南・村井琴山・古林見宜らが着用している儒服の類が挙げられる。儒服は儒者の着る衣服をいい、漢学への強い指向を物語る衣服といえよう。

以上、『杏雨書屋所蔵医家肖像集』(武田科学振興財団、2008.6)を用いて、肖像画に描かれた医師の装束を検討した。肖像画に描かれている装束には、着用している医師の官位、あるいはその医師の背景ともいうべきものが現れていることは明らかである。医師の官位制度、伝記を明らかにしていく上で装束・肖像画の検討は重要課題であることが改めて認識された。

書籍紹介

ジェイムス・ライリー著

門司和彦・金田英子・松山章子・駒澤大佐 訳

『健康転換と寿命延長の世界誌』

世界の人口規模の大きい国の中でもっとも長い平均寿命を誇る日本に住んでいると、そのようなことを考えないで暮らしていることが多いのではないだろうか。

大学の看護系学部新生に公衆衛生学・保健学概論の授業として、マルサスの人口論に始まる疾病転換や健康転換・人口転換を話しているが、日本の現代に生まれ育った世代にとり、高度成長期以前の日本を説明するのはなかなか難しい作業である。現在の日本の初等・中等教育の中での教養と

しての歴史教育の欠落は大きいように感じられる。

現在、極端な少子高齢化は日本だけでなく、東アジア全体に広がりつつある。一方、一極化・一体化に向かっていた世界経済は大きな試練を迎えており、宇宙船地球号に乗り組むヒトの将来像はなかなか描けないものになってきた。

本書はインディアナ大学の歴史学教授で人口と世界の健康に関する研究者であるJames C. Riley教授が2001年に出版したRising Life Expectancy: A Global History (Cambridge University Press)を総合